事甚だ大なるものありしならむと。

優秀なる種を增加せしめむとする優生學の方策に至りては自殺的である、自己矛盾である。劣等分子除却の方策は必ずしも不可能ではない、吾人はたゞその無意義なるを疑ふに止まる。優秀分子增加の方策に至りては自ら濠を掘つて其中に溺れ、自ら火を放つて其中に投ずる趣がある。たゞに無意義なるに止らずして全然不可能である、と云ふよりも愈其目指する所に背馳せむとするものである。優秀なる分子の增加の方策としては一夫多妻制度を主張せざる限り、適當なる結婚——優秀分子の結合による外はないと考へられてゐる。併し吾人の見る所を以てすれば、これ社會の中より漸次に優秀の種を減し盡すものである。才能ある階級に於て出生減少の特に著しい事は文明國共通の病弊である、而して益著しきを加へむとする病弊である。これは才能そのものゝ故に生ずる現象ではない、才能ある男子が社會的の地位を高め得るが故に生ずる現象である。今優秀の男子に配するに優秀の女子を以てせよ、優秀の種は男女に於て共に亡びる、優秀の男子を凡庸の女子と凡庸の男子を優秀の女子と配せしめよ、優秀の男子の種は減ずべきも優秀なる女子の種は亡びない。結局優生學は優秀の種の自殺を敎ふる學であり、同時に優生學自體の自殺を意味するものではあるまいか。かくて、今日の自然に放任したる結婚方法は遙によく優秀の種を保存する方策である。然れども吾人は一歩を進めて考へなければならぬ。よし優種學の方策が優秀の人を多く生ずる結果を齎すにしても、その事自體に果して幾何の意義があるであらうが。社會は一方に於て特に優秀なる小數人、他方に於て多數の凡庸人に相分れる。恐らく自然其間に漸次婚姻的結合の絕ゆるのを見るであらう、二三又は以上のカストは形成せられざるを得ない。此の如きは所謂社會進化の逆轉と見るべきではなからうか。これ一の結果である。又かくて社會に少數の優秀分子を擧げ得るとしても多數の凡庸人は依然として存する。如何にして社會全體の遺傳的素質を平均的に向上せしめ得たりと稱し得るであらうか。panmixie はないかも知れない、其所期する所の平均的の向上は求む可くもないと信ずる。これ他の一の結果である。

以上簡單ながら一通り、優生學に對して久しく抱き來つた疑問を開陳する事を得た。談多岐に亘りて齋藤學士の本書の內容よりは遙に絲遠き方にまで外れたのは、勞、已を得なかつたのである。學士の著書によりて此疑問を逃ぶる機會を與へられたる事に對しては深く感謝の意を表すると共に、切に學士の高敎を仰いで此蒙の啓かれむ事を望む。妄評多罪。(定價一圓二十錢　不老閣書房發行)(高田保馬)

哲學汎論

文學士　木下四郎一著

本書は緖論に於て哲學の定義、分類等につき述べ、本論に於て哲學上の諸問題を揭げて著者一流の解決を試み、次に古來の哲學上の諸說を簡單に列擧し、最後に結論として著者の所謂哲學研究法と哲學的宗敎なるものを論じて居る。

立論叙說凡べて在來の此種の著述とは頗る類を異にして居て、哲學上の術語や、問題や、諸家の學說やを忠實に紹介して、斯學入門の士の手引としようと云ふよりは、寧ろ著者自身の意見や、

所信やを、順序を立てゝ分り易く述べるといふのが主要なる目的らしい。從つて書中往々獨斷的の誹を免れ得ぬ點や、各部に聯絡を缺ける所があるのは甚だ遺憾である。例へば靈魂不滅の論證(百十一頁以下及び二百五十九頁以下)の如きは前者の例であつて、書中本論の前半と後半哲學上の諸說といふ部分との統一的聯絡を缺いで居る如きは後者の一例である。

要するに我々は普通に哲學概論とか綱要とか云ふ名稱で世に行はれて居る書に對するのと同じ態度と期待とを以て本書に臨むならば少なからず失望せざるを得まい。然し著者が大膽に自己の所信を發表し、又成るべく平易に說明せんとせる努力は感服すべきものと云はねばなるまい。東京　洛陽堂發行。定價壹圓拾錢、(勝部謙造)

現代批判

文學士　紀平正美外三氏著

『體驗することゝ、批判することゝを、離して考へ得られたいやうになつたのは、現代人の生活上の特徵である。言ひ換へれば吾人の生活は體驗の自照、卽ち批判に盡さる、「現代批判」は斯の如き精神を以て現代に住せんとする吾人の生活の表現である。吾人は飽くまで感性を銳敏にし、理性を透徹せしめ、以て全一に生きることを自己教養の理想とする』ことを榜語として現はれた「現代批判」第一輯は、紀平正美氏の「批評の意義」を冒頭に、土居光知氏の「藝術的形象と流動」、田部重治氏の「デイ・プロフアンデスに現はれたるワイルドの思想」を、最後に稻垣末松氏の「露國思想家の見たる哲學の現在及將來」の譯を編んだものである。就中、土居光知氏の研究は最に眞て最も優り、且つ此種美學研究に、近來になき重味のあるものなることを特記するに憚らない。之と幷んで田部氏のはポピユラアなワイルドに、一種の見解を立てゝゐる點に於て、世人の興味を喚起すべき好箇の讀物たるを疑らないと信ずる。紀平氏のものは、批評の意義に就て、批評の本質たる破邪的意義は、自我の確立、自己の哲學を待ちて始めて、顯正の實を擧げうべく、徒に批評の爲めの批評卽ち氏の言葉を借れば「樂屋落ち」、廣く言へば詭辯の架空を廢しうべきを啓蒙せる點、特に「現代批判」の榜語たる體驗の自照を道破せるを、心强く感ずる。稻垣氏のは第二輯に亙るを以つて玆に說かず。從つて、玆には土居田部二氏のものを批評するに留める。

土居氏の「藝術的形象と流動」の考察は、氏自らの自信するところによれば藝術の本質を捕促するに最も適切なる見地に立つものであると云ふことだ。土居氏は「活動」をベルグソンの說に從つて宇宙の本體と認めてゐるかどうかは判らない。併し少くとも「藝術的形象」との交涉に於ては、ベルグソンの流動と形象との關係に對する批判を示さない限りに於て、ベルグソンに從ふものと見ねばならない。而してかく認容せられたる流動を、氏は藝術的活動の根本的事實と見做すことには躊躇してゐないやうに見受けられる。遮英、之等總ては、「藝術的形象」の理解に懸る。藝術的形象の理解は亦、藝術的形象と然らざる形象卽ち外的形象との相違を、主觀の見る性質の上に考へなければならないから、此の見る性質の理解と離るべからざる關係に立つ。而して藝術的形象と密接なる關係に繫がる見ることを直觀と解し、主觀の內面的世界を